

# 「毛利家の栄枯盛衰 ～戦国から幕末までつながる歴史」

黒田裕樹（ブログ「黒田裕樹の歴史講座」）

## 1. 毛利元就の重大な決意が歴史を動かす

皆さんは、我が国の歴史の中でどの時代が一番好みでしょうか。

色んな意見があるとは思いますが、おそらく一番多いのが戦国時代でしょう。多くの小説や映画、TVドラマなどで紹介されるだけでなく、NHKの大河ドラマでも何度も取り上げられていますね。

戦国時代の主役ともいえる戦国大名は、いずれ劣らぬ豪傑ぞろいですが、その中で天下統一に一番近かったのは、いうまでもなく織田信長(おだのぶなが)でしょう。もし本能寺(ほんのうじ)の変が起きていなければ、おそらくはあと数年で統一を成しとげたものと考えられます。

では、信長に次いで天下に近かったのは誰でしょうか？

豊臣秀吉(とよとみひでよし)や徳川家康(とくがわいえやす)のように、信長の路線を継承して天下統一を果たした武将の名が挙げられそうですが、それよりも「一代で何ヵ国もの領地を手中に収めた大名」こそがその地位にふさわしいとすれば、間違いなく断言できる武将がいます。

彼こそが毛利元就(もうりもと)です。今回の講座では、毛利元就の生き方や時代背景からその生涯を、さらには元就亡き後の毛利家の栄枯盛衰に関して、戦国時代から幕末までの流れとともに振り返ってみたいと思います。

毛利元就は、安芸(あき、現在の広島県西部)の国人(こくじん、地方豪族のこと)から、彼一代で中国地方のほぼ全域と北九州の一部を支配するまで勢力を拡大した、稀代(きだい)の英傑でした。そんな彼の生涯を象徴するのにふさわしい言葉があるのですが、皆さんは何かお分かりでしょうか。

それは「謀略(ぼうれきやく)」です。実は、数多くの戦国武将の中で元就ほど謀略に満ちた生涯を送った武将はいないのです。なぜそう言い切れるのかを、彼の生き様をたどりながら考えてみましょう。

毛利元就は、1497年に安芸の国人である毛利弘元(もうりひろもと)の次男として生まれました。当時は長男が家督(かどく)を継ぐ、すなわち跡継ぎになるのが原則でしたから、次男坊であった元就は、本来であれば毛利本家を継ぐことができず、当時住んでいた城の名前から「多治比(たじひ)殿」と呼ばれて一生を終えるはずでした。

ところが、長男の毛利興元(もうりおきもと)が 25 歳の若さで急死して、さらに跡を継いだ興元の長男の幸松丸(こうまつまる)も 9 歳で死亡するという「幸運」があったので、結局元就が家督を継ぐことになりました。もっとも、元就が後継となった際には反対者もいましたし、他家から養子をもらってほしいという声もあったのですが、元就はこれらの者を「反逆者」と見なして、「戦(いくさ)上手」とうたわれた実力で「処分」しました。

こうして 27 歳で毛利家当主となり、吉田郡山城(よしだこおりやまじょう)に入城した元就は、内心で「重大な決意」をしていました。

元就が家督を継いだ頃の毛利家は、安芸の一部を領しているに過ぎず、いわゆる「弱小勢力」のひとつでしかありませんでした。一方、当時の中国地方は主に東半分を尼子家(あまごけ)が、西半分を大内家(おおうちけ)が領有していました。このうち、勢いがあったのは尼子家の方で、大内家は窮地(きゆうち)に立たされていました。

毛利家は、元就が家督を継ぐまでは尼子家側についていましたが、元就が当主の座につき、自己の意思で毛利家を支配できるようになると、家臣たちに宣言しました。

「我が毛利家は尼子家を見限り、今後は大内家側に味方する」。

元就のこの決断が、どれだけ常識はずれで、かつとんでもないことであるかを、皆さんはお分かりでしょうか。

「寄らば大樹の陰」ということわざがありますが、それまでの毛利家は、大勢力の尼子家に味方することで領地が保障されていたのですから、まさに尼子家という「大樹」に寄り添って生きてきたようなものでした。

それなのに、尼子家側から大内家側に寝返るという元就の決断は、当然尼子家の怒りを買うことになり、下手をすればすぐにでも滅ぼされてしまいかねないという、極めて危険な行為でした。一体元就は何を考えていたのでしょうか。

実は、元就には元就なりの「計算」があったのです。大内家側につくことを決断した元就の内心の思いを代弁してみましょう。

「巨大な尼子家についていけば、俺がどれだけ頑張っても結局は尼子家の手柄になり、いずれは俺の出番はなくなる。だとすれば思い切って大内家について、俺の実力で尼子家の領地を切り取り、毛利家を大勢力にしてみせよう。そのうえで尼子家を滅ぼし、あわよくば大内家も乗っ取ってやろう」。

皆さんは、元就のこの言葉を聞いて、正直どう思われるのでしょうか。

巨大な尼子家に対して、一つの国すら満足に治めていないという、弱小地方豪族に過ぎない毛

利家の当主の決断です。普通ならば「元就は本気でそんな無茶なことを言っているのか」と耳を疑いますよね。ところが、元就はこの後、生涯をかけて自身の決断を本当に実行してしまうのです。

何が元就をそこまでの大成功に導いたのでしょうか？

そんな元就のカギを握ったのが、まさに「謀略」でした。この後、彼は自己の謀略の才能をフルに活用して、勢力を拡大していったのです。

## 2. 謀略の限りを尽くして大大名となる

大内家側について元就は、尼子家側の国人を片っ端から倒して勢力を拡大していきました。「裏切り者」の毛利家の行動に業(ごう)を煮やした尼子家は、元就を倒すべく、当主自らが大軍を率いて攻め込む決断をしました。

尼子家が攻め込む少し前のある日、元就のもとに尼子家の右筆(ゆうひつ、本来は手紙などの代書人だが秘書官でもある重要な職務)であった男が転がり込んできました。男は些細(ささい)な失敗を尼子家にとがめられて所領を没収されたことに腹を立て、今後は毛利家に味方したいと述べました。

「スパイではないか」「信用しないほうがいい」という家臣たちの声をよそに、元就は男を歓迎しました。そして、尼子家の来襲が近づいて軍議を開くたびに、男の前で「今度の戦いでもし尼子家にA地に陣取られたら、大内家との連絡が絶たれて大変なことになる。何としてもB地に陣取ってもらうようにしなければ」と何度も言いました。

ところが、尼子家が来襲する直前に男は姿を消しました。周囲の心配どおり、男は尼子家のスパイだったのです。それ見たことかと家臣が抗議する前で、元就はニヤリと笑って言いました。

「これで尼子家はA地に陣取るだろう。だが本当に陣取られたら困るのはB地の方だ。この戦い、我が軍の勝ちだな」。

元就は尼子家のスパイ作戦を見抜いて、わざとニセの情報を流したのでした。戦いは大内家の援軍もあって毛利家が勝利しました。1540年から41年にかけて行われたこの合戦は、吉田郡山城の戦いと呼ばれています。

大勢力の尼子家に勝った毛利家は武名を大いに挙げ、それまでの支配地にも良い影響を及ぼしたのと対照的に、負けられない戦いを落としてしまった尼子家の評判はガタ落ちとなり、それまで尼子家側についていた国人の多くが大内家側に寝返ることによって、尼子家と大内家との立場が逆転し、尼子家の勢力が衰えるきっかけになりました。

その後も元就は尼子家に攻撃を続け、多少の紆余曲折(うよきよくせつ、ものごとが順調に運ばずに複雑な経過をたどること)はあったものの、1566年に尼子家は元就によって滅ぼされてしまいました。

さて、元就は戦いで勢力を拡大する一方で、自分の足元を固めるために、有力な豪族である吉川家(きっかわけ)や小早川家(こばやかわけ)に自分の息子を養子に送り込みましたが、その経緯には複雑な事情がありました。

吉川家は元就の妻の一族でしたが、家臣の方から「当主に不満があるので、元就の次男である元春(もとはる)を新たに養子に迎えたい」という申し出がありました。元就はこの申し出を承諾し、縁組に反対する家臣が切腹するなかで、元春は「順調に」家督を継ぐことに成功しました。

一方の小早川家では、幼い当主が病気によって目が不自由となり、このままでは戦国の世を渡っていくのは厳しいということで、これも家臣の方から「元就の三男である隆景(たかかげ)を新たに養子に迎えたい」との申し出がありました。元就はこの申し出も快諾し、縁組に反対する家臣が殺されていくなかで、隆景は「順調に」家督を継ぐことに成功しました。

こうした養子先からのわざわざの申し出という「幸運」によって、武勇名だたる吉川家と、強力な水軍を持つ小早川家を自身の血統で固めることができた元就が、安芸の支配力をますます強めていくのですが、いくらなんでも話がうますぎると思われそうです。

真相は闇の中ですが、犯罪捜査における鉄則である「事件後に一番得をした者を疑え」という格言から考えれば、謀略を得意とする元就に対して、どうしても疑いの目が向いてしまう結果ではあります。

さて、元就が味方について大内家ですが、家臣同士の対立がやがて不協和音を生み、有力家臣の陶晴賢(すえはるかた)が1551年に当主の大内義隆(おおうちよしたか)に対して謀反(むほん)を行い、義隆が自害したことによって衰えていきました。

陶晴賢の謀反に激怒した「大内家の味方」である元就は、晴賢による大内家の支配を認めなかったことで晴賢と対立し、両者はついに激突して元就が晴賢を倒したことは有名ですが、実は、この話には「とんでもない裏事情」があったのです。

吉川家に残された史料によれば、晴賢は義隆への謀反の前に「義隆との仲が決裂したので、自分に協力してほしい」と元就の次男である吉川元春宛に書状を送っているのです。

ここで元就の立場になって考えてみましょう。元就が本当に大内家の忠実な味方であれば、書状の存在をここぞとばかりに義隆に訴えて、自らの忠誠心をアピールするのが当然です。

しかし、歴史上の事実ではそんなことはありませんでした。ということは、晴賢の謀反は元就も承知のうえでのことだったのです。にもかかわらず、元就は晴賢には味方せずに対立しました。晴賢からすれば裏切られた思いだったでしょう。なぜ元就は晴賢を裏切ったのでしょうか。実は、そこには元就の凄まじいまでに計算しつくされた謀略があったのです。

元就は、大内家側について自己の領地を確実に拡大していきましたが、いずれは大内家をも

滅ぼすつもりでした。そんななかで、大内家の家臣である陶晴賢が謀反を考えているという情報を入手しましたが、このときに元就の頭の中でひらめいた作戦がありました。

「俺は表向きではあくまで大内家の味方だから、俺自身が大内家にいきなり弓を引くことはできない。ならば、晴賢をそそのかして彼に大内家を滅ぼさせよう。その後で『大内家に仇(あた)なす晴賢を征伐する』という名目で晴賢を倒せば、大内家の領地は易々(やすやす)と俺のものになる」。

元就は自分の作戦どおりに実行しました。晴賢が大軍を率いて厳島(いつくしま)に攻め込んだ際も、元就は謀略を使って、大軍であるがゆえにかえって身動きの取れない晴賢を釘付けにしたところで奇襲をかけて、自害に追い込みました。1555年に起きたこの合戦は、厳島の戦いと呼ばれています。

義隆に次いで晴賢も失った大内家はガタガタとなってしまう、厳島の戦いから2年後の1557年に、満を持して攻め込んだ元就によってついに滅亡しました。戦国の世の非情さを否応(いやおう)なく感じさせる大内家の最期ですね。

こうして大内家の領地を支配した元就は、先述のとおり 1566年には尼子家も滅ぼし、元就は一代で中国地方のほぼ全域と北九州の一部を支配する大大名になったのでした。

さて、毛利元就といえば有名なエピソードがありますよね。いわゆる「三矢の訓(おしえ)」のことです。

自分の死期を悟った元就は、息子たち三人を枕元に呼び出して言いました。「一本の矢は簡単に折れるが、三本束(たば)ねると折ることができない。お前たちも三人が団結して毛利家を守り立てれば、こんなに心強いことはない」。

毛利家の固い結束を連想させる美談ですが、実はこれは真っ赤なウソです。なぜなら、三人の息子のうち、長男の隆元(たかもと)は元就よりも先に死んでいるからです。

では、元就は死ぬまでに息子たちに言葉を残さなかったのでしょうか。実はちゃんと残しているのですが、その内容はとんでもないものでした。

「当家(=毛利家)を良かれと思う者は、他国のことは申すまでもなく、当国においても一人もいないだろうから、よくよく用心せよ」。

なんとも凄まじいまでの人間不信ですね。それにしても、元就の本当の遺言が無視されてまで「三矢の訓」というフィクションが広まったのはなぜでしょうか。

元就が謀略に次ぐ謀略を重ねたことによって、毛利家は大大名になりましたが、その過程では多くの敵から恨まれただけでなく、吉川家や小早川家を強引に乗っ取ったことにより、身内からも恨まれる結果となりました。

だとすれば、今後毛利家が栄えていくためには「一族の団結」こそが重要であり、そのためにも「三矢の訓」という「神話」が必要だったのです。

さて、元就は1571年に75歳で亡くなりましたが、家督を継いだ孫の毛利輝元(もうりてるもと)の凡庸(ぼんよう、すぐれた点もなく平凡なこと)な器量を心配し、次男の吉川元春や三男の小早川隆景らに輝元の補佐を依頼しました。

元就の死後、毛利家は織田信長の攻勢によって領土の半分近くを失いましたが、それでも合計で120万石を超える広大な領地を輝元が所有できたのは、上記の叔父たちの尽力によるものでした。

豊臣秀吉の天下統一後、毛利家は輝元が隆景とともに秀吉の五大老として君臨したことで安泰でしたが、1597年に隆景が亡くなったことで、頼りにしていた叔父たちがすべて死んでしまったうえに、その翌年には秀吉も亡くなってしまい、再び天下が乱れる気配を見せると、元就の心配が現実のものとなってしまっていました。

### 3. 関ヶ原の悲劇がもたらした討幕への流れ

秀吉の死後、徳川家康と秀吉の家臣であった石田三成(いしだみつなり)とが対立し、両者は1600年に関ヶ原で激突しました。このとき、毛利輝元は三成率いる西軍の総大将に祭り上げられ、大坂城に入城しましたが、いわゆる「関ヶ原の戦い」で彼が動くことはありませんでした。

実は、毛利家の一族であった吉川広家(きっかわひろいえ)が、家康率いる東軍に通じていたのです。広家は輝元が大坂城から出陣させないように工作するとともに、自軍は関ヶ原で一切動かずに「不戦」を貫(つらぬ)きました。

広家による努力の甲斐あって(?)東軍が勝利すると、広家は家康から「毛利家の本領安堵(ほんりょうあんど、領地をそのまま保障すること)」の約束を取り付けました。

広家の工作を戦後に知った輝元は、怒るどころか本領安堵の約束をむしろ喜び、家臣の「大坂城に留まって戦うべきだ」との声を無視して、大坂城を「無傷で」家康に明け渡したのですが、これがとんでもない失策でした。

家康は輝元が大坂城を明け渡した途端に、それまでの温和な態度を一変させ、手のひらを返したように「毛利家の領地没収」を宣言したのです。この時になって、輝元ばかりでなく広家も含めて、自分たちが家康にだまされていたことに気がついたのですが、後の祭りでした。

広家による必死の懇願(こんがん)で、辛うじて断絶を免れた毛利家でしたが、それまで120万石あった領地は、周防(すおう、現在の山口県東部)と長門(ながと、現在の山口県西部)の2カ国のみ約37万石に激減してしまいました。

何と領地の約3分の2が一気に削られてしまったのですが、毛利家がこのような仕打ちを受けずに

済む方法はなかったのでしょうか。

その可能性は確かにありました。家臣が勧めたように、大坂城で家康相手に戦えばよかったです。大坂城は天下の名城ですから、そう簡単に落とされるものではないですし、仮に負けたとしても、家康の心の中に「毛利家を敵に回したくない」という感情が芽生(めば)えたはずでした。

実は、島津家(しまづけ)が同じことをしているのです。西軍側についた島津家は、関ヶ原の戦いが終わると、東軍の激しい攻撃を受けて100名に満たない人数になりながらも、領地の薩摩(さつま、現在の鹿児島県西部)へ無事に引き上げました。

その後も徹底的に抗戦して粘った島津家に対し、家康は取り潰(つぶ)しをあきらめ、島津家の本領安堵を認めたのです。

島津家と同じように抵抗すべきだったのに、家康の謀略に簡単に引っかかって、あっさりと大坂城を明け渡した輝元の大失態であり、謀略で鳴らした元就の孫とはとても思えない「ダメ武将」ぶりでした。

かくして「格下げ」されてしまった毛利家は、新たな城を交通の便の良くない山陰側の萩(はぎ)に築くことを強制されたり、江戸幕府で普請(ふしん、土木工事のこと)が行われる際に自費で手伝わされたりするなど、散々な目にあいました。

毛利家の家臣たちは、自分らが受けなければならない仕打ちを悲しみましたが、主君である輝元の凡庸さが没落の原因であると批判できなかつたので、非情な処分を行った江戸幕府をむしろ深く恨むようになりました。時代が下るにつれて恨みは代々受け継がれ、毛利家にはいつしか以下のような伝説が生まれました。

参勤交代で本国に帰った毛利家の殿様が国元で迎えた正月の夜明け前に、家老と二人だけでお城の天守閣に登ると、家老が殿様に言いました。

家老「江戸征伐の準備が整いましたが、いかがなさいますか？」

殿様「まだその時期ではない、やめておけ」

もちろん実際には江戸征伐など夢のまた夢でしたが、徳川家への恨みが積もり積もっていくうちに、幕末の頃になると、毛利家は討幕の雄藩たる「長州藩」として、薩摩藩とともに君臨するようになりました。

また、毛利家の幕府に対する積年の恨みは、松下村塾(しょうかそんじゅく)を開いた吉田松陰(よしだしょういん)から桂小五郎(かつらごろう、後の木戸孝允=きどたかよし)や高杉晋作(たかすぎしんさく)、伊藤博文(いとうひろぶみ)、井上馨(いのうえかおる)、山県有朋(やまがたありとも)といった優秀な人材を生み出しました。

彼らの活躍によって、討幕が現実のものとなったのみならず、明治維新を経て短期間で近代化に成

功し、世界の一等国として欧米列強と肩を並べるまで成長する原動力になったのです。

毛利元就という英雄が一代で築き上げた広大な領地は、彼が心配したとおりに孫の輝元によって大幅に減らされてしまうという悲劇となりました。しかし、その結果が皮肉にも約 260 年後に討幕の原動力になり、やがては我が国の近代化に貢献することになるのですから、歴史の流れというのは本当に不思議なものです。

元就という英雄によって大大名となりながら、輝元の失態によって大幅に領地を削られる悲哀を味わうといった、栄枯盛衰を絵に描いたような毛利家の歴史ですが、実は我が国の戦国時代から幕末につながる歴史をつくった「陰の主役」でもあったのです。自分の子孫とその家臣たちが、幕末に徳川家康の子孫を倒していく光景を、元就はどんな思いで見つめていたのでしょうか。(完)

主要参考文献：「逆説の日本史 9 戦国野望編」(著者：井沢元彦 出版：小学館)  
<http://www.shogakukan.co.jp/books/09379420>

「逆説の日本史 12 近世曙光編」(著者：井沢元彦 出版：小学館)  
<http://www.shogakukan.co.jp/books/09379682>

YouTube 再生リスト「毛利家の栄枯盛衰」  
[https://www.youtube.com/playlist?list=PLeZrZWY-wML6zAI0fphydOEgw\\_dcthstV](https://www.youtube.com/playlist?list=PLeZrZWY-wML6zAI0fphydOEgw_dcthstV)

黒田裕樹の歴史講座  
<http://rocky96.blog10.fc2.com/>

※黒田裕樹の「百万人の歴史講座」でダウンロードできる全ての pdf (テキストファイル) は、黒田裕樹が著作権を持つ著作物であり、またその販売権は「南木倶楽部全国」を主催する南木隆治にあります。これらのファイルを第三者が再販売・不特定多数に対して再配布することはできません。